

## 至高芸術の創造を目指して

—Wallace Stevens の場合—

### 坂 本 季 詩 雄

Wallace Stevens (1879–1955) の詩を読むとき、まずそのタイトルを散見するだけで威圧感を感じたり、読み進めばすぐに語の難解さと華やかさ、とりとめもないイメージの羅列に戸惑う読者は少なくないであろう。その世界は高度に抽象化されており、読み手には詩人の意図するところは容易には理解できない。それは前もっては存在し得ない意味を讀みの行為の中に作り出すために Stevens のとった戦略ではないだろうか。

この論文では彼の作品理解の困難さは、読者の讀みの行為への挑発であり、能動的な参加の呼びかけであることを明らかにしたい。そして Stevens のテキストが予測不可能で未知の意味を最終的に生み出すことを代表作、“Notes toward a Supreme Fiction”の中で検証したい。

### I “The first idea” への回帰と、“major man” の成立

Stevens は自らの作品を、“a supreme fiction” とするため、言葉になる以前の感情や感覚を言葉によって表現しようとした。換言すれば無意識の世界の産物を、意識の世界の道具、言葉を使い、彼の流儀で料理しようとしたといえる。このとき素材の新鮮さが味の決め手となる。コンテキストという、言葉の網によって無意識の海からすくいとられたばからの生きの良い素材を、彼は “the first idea” と呼ぶ。

The poem refreshes life so that we share,  
For a moment, the first idea . . . It satisfies

Belief in an immaculate beginning

And sends us, winged by an unconscious will,  
To an immaculate end. We move between these points:  
From that ever-early candor to its late plural

And the candor of them is the strong exhilaration  
Of what we feel from what we think, of thought  
Beating in the heart, as if blood newly came,

An elixir, an excitation, a pure power.<sup>1</sup>

この“the first idea”は、理性と無意識の境界から萌えてたばかりの、“an immaculate beginning”である。萌えて出てもないために、混沌とした無意識の領域にあったときの感情や感覚に備わるダイナミクスは失われていない。それは永続するものではなく生まれては消え、消えては生まれる存在である。しかしそれゆえ、固定した日常生活へ、絶えず新鮮味を付加することが可能となる。

上記のことを可能にするため詩人は読者を読みという行為へと誘い込む。その道具立てとして、Stevensは“the first idea”をとらえることのできる存在、“major man”をこの作品の中に登場させている。この人物は作品中、様々な人物になり、常に言葉と事象、または感情の間で揺らぎ続ける。そして自ら“the first idea”を具現しようと試みる。

それでは“major man”が“the first idea”を捕らえるために、どのような存在でなければならないかを検討してみよう。

But apotheosis is not

The origin of the major man. He comes,

Compact in invincible foils, from reason,  
 Lighted at midnight in revery, the object of  
 The hum of thoughts evaded in the mind,

Hidden from other thoughts,

(CP, 387-88)

ある事象を理想化、あるいは神話化するということは、その事象を一般化することにつながる。“major man”は“the first idea”の揺らぎをとらえ、具現していかねばならないので、一般化されてしまうのをもっとも嫌う。固定されてしまつては揺らげないからである。さらにこの人物は、意識と無意識の境界で生まれ出る“the first idea”を捕らえるため、理性と非理性、または意識と無意識の両方の要素を兼ね備えた存在である。そしてこの2つの相反する要素は互いに依存し合う関係にもある。

## II “major man”の理性的側面

“major man”のもつ2つの性質のうち、理性的な側面は必然的に備わるものである。なぜなら彼は言語という精神活動を備える人間によって発明されたものだからだ。彼の理性的側面がどのような機能を作品中で果たすかを検討してみよう。

“The first idea was not our own. Adam/In Eden was the father of Descartes” (CP, 383) Descartesとは近代的理性の創始者である。世の中を精神と自然に分断するというプラトンにより生み出された2元論を近代に復活させた人物である。「我れ思う故に我れあり」という彼の第一原理は、思考することが我々の存在の根拠となることを、明らかにした。理性的に考えることで、万人が真理に到達可能であるとした。これにより人間は全て同じ型をしたものである、という近代の理念が生まれた。そして我々は世界を理性に

よって合理化し隅々まで把握しうる、固定した物に作り替えることが可能になった。すなわち次のようである。

We reason of these things with later reason  
 And we make of what we see, what we see clearly  
 And have seen, a place dependent on ourselves. (CP, 401)

Descartes による近代理性は、「考える私」という自我と自然、精神とものとの間を完全に分け隔ててしまう弊害を生むことになった。

一方、その父としてのエデンの園のアダムとは、知識を手にする前のアダムである。彼は神に次の役割をあたえられる。

So out of the ground the Lord God formed every beast of the field  
 and every bird of the air, and brought them to the man to see what he  
 would call them; and whatever the man called every living creature,  
 that was its name. (R. S. V., 2: 19)

つまりすでに存在するものに対してレッテルを張る役目を与えられたのだ。その後、我々は彼により名付けられた事象を、言葉により識別できるようになった。

この2人の類似点は共通認識を得ること、あるいはそれにより世界の記述を可能にした点である。彼の作り上げた、現行の世界秩序の中で、我々は意志疎通を行っている。大部分の我々は彼等と同様に、共通認識の成り立つ世界に住んでいると言えよう。換言すれば、言語により作り上げられ、秩序づけられた世界に生きている。しかしこのような既存の世界秩序、言語コードの成立する枠内に留まる限り、“We are the mimics.” でしかない。既存の概念には含まれず、生まれたばかりの概念、“the first idea” の探求へと読者を誘惑する詩人は、次の側面を“major man” に付与する。

### Ⅲ “major man” の非理性的側面

詩人の誘惑をうける読者は、彼の解説不可能とも思えるメッセージに当惑する。これは詩人の意図するところである。しかし読者は当惑するだけでなく、作品を読むという行為により、能動的に自らメッセージを発信する。相互にメッセージを発信し、そのせめぎあいの場を作ることもまた、詩人の意図するところであろう。

ここで“major man”に与えられた非理性的側面が、読者の読みの行為を誘発するため、どのように機能するかを、MacCulloughと名付けられた例に考察を進めよう。

まず“major man”は“a castle-fortless-home”にその存在基盤を与えられる。この城であり且つ砦、住居でもある建築物は、想像力によって作り上げられたものである。この作品の他の部分においても想像力を飛翔させるための空間として建物やその部屋が用いられる。詩人のmindに対する次の考え方をみれば、外部の現実事象の暴力に耐え、一時的であれ自己を守るための空間を確保することが必要だと分かる。それ故、想像力によって隔々まで手入れされた宮殿は、“the first idea”の生息地として最適だと思われる。

The mind has added nothing to human nature, it is a violence from within that protects us from a violence without. It is the imagination pressing back against the pressure of reality. It seems, in the last analysis, to have something to do with our self-preservation; and that no doubt, is why the expression of it, the sound of its words, helps us to live our lives.<sup>2</sup>

イマジネーションによって作られたこの空間は、ある意味では劇場である。すると“major man”はMacCulloughという役を与えられた役者のような存在である。役者は特定の「性格」を持たないで、あらゆる人物を演じる。

換言すれば、“major man”は「無」であることにより「万物」に精通すると言える。

StevensはこのMacCulloughを“any name, any man”であるとし、特定の人物がモデルであることを否定している<sup>3</sup>。つまりMacCulloughに“major man”の持つ、あらゆる物に変化し、“the first idea”を補足する能力を託していると言えよう。

しかし“the first idea”をイメージーションにより補捉する“beau linguist”として、“major man”はMacCulloughと、なぜ名づけられねばならないのだろうか。というのはStevensがアイデンティティーについて、次のように考えていることをみると奇異に感じられるからだ。“Both in nature and metaphor identity is the vanishing-point of resemblance.”(NA, 72)ここでは、固有名詞を与えられたことで“major man”はどのような機能を獲得するのか考えてみよう。

固有名詞のはたらきを、普通名詞と対比しながら考えてみる。まず普通名詞は、共同体の中での共通理解に基づき、一般化された概念をやりとりする。その概念により一括された集合体を指し示すので、安定した意味を常に維持し続ける。つまり人間には無数の個体差があるにもかかわらず、その違いは捨て去られ、普通名詞、「人間」に共通する属性によって一般化される。

それに対して固有名詞では、普通名詞が依拠する共通理解を本来的に欠いている。そして個別の事象を個々に直接指し示す。そのため言語というシステムの中では、固有名詞の占める位置は比較的自由に不安定である。しかし一旦コンテキスト内に置かれると、共通理解を欠いていて、意味的に空虚な空間へと想像力が押し寄せ、その空間を埋めようとする<sup>4</sup>。

この作品に関しても、固有名詞、MacCulloughが作り出す意味的に空虚な空間を埋めるべく、Harold Bloomは次のように想像力をはたらかせている。

MacCullough was the name of a hardheaded clan, producing eminent political economists, geologists, and even the American Secretary of the Treasury when Stevens was a student at Harvard . . . we expect Whitman and not MacCullough to be experiencing poetic incarnation while lounging by the sea.<sup>5</sup>

実際、作品中次の箇所では、ライラックが放つ紫色の香り漂う Paumanok 河畔へ打ち寄せる波を見ながら、思い出の歌を歌う Whitman 的イメージと MacCullough を重ね合わせる。

If MacCullough himself lay lounging by the sea,

Drowned in its washes, reading in the sound,  
About the thinker of the first idea,  
He might take habit, whether from wave or phrase,

Or power of the wave, or deepened speech,  
Or a leaner being, moving in on him,  
Of greater aptitude and apprehension,

As if the waves at last were never broken,  
As if the language suddenly, with ease,  
Said things it had laboriously spoken.

(CP, 387)

身の回りの現実事象との自己同一化を図った Whitman 同様、MacCullough は想像力を受け入れて、自己肥大していく。“a leaner being” が “an extension of man in fiction” であると Stevens の考えは (LWS, 434) このことを

裏付ける。

“major man”はMacCulloughと名付けられコンテキスト中に置かれることで、一義的な意味を持つのではなく、逆に回りの空間を自己同一化しつつ、多義性を帯びる。そして押し寄せる想像力をダイナミクスとして自ら意味生成の拠点となる。

しかしここでMacCulloughの役割に終止符がうたれる。“Give him/ No names. Dismiss him from your images.”(CP, 388)この男にとって意味的に静止することと、詩的生産性を放棄することは同義なのだ。だから読者が彼によって発信されたコードと、自らのコードをぶつけ合い互いに変容しだすと、頃合いを見計い彼は自らを別のコンテキストへと移動させる。そして読者の思考回路を巧みにすりぬけて、新たな地点での意味の地平を創造するよう読者を誘い続けるのだ。この意味で“major man”は“inconstant objects of inconstant cause/ In a universe of inconstancy.”(CP, 389)として変容し続ける。

#### IV 理性と非理性の調和

“major man”は常に変化し続けねばならないので、その原動力として理性と非理性という、“Two things of opposite natures”(CP, 392)を必要としている。そして彼が読者を誘惑するときには、読者も作品を読むという行為の中で、能動的にメッセージを発信する。互いに自らのコードをぶつけ合わせるため、詩人が初めに意図した地点とは異なる意味の地平が生じ得る。この出来事は個別的なものであり、さらに偶然性に左右されてしまう。そうすれば詩人の意図した意味さえ不確かになる。このことを詩人は、

..., not balances

That we achieve but balances that happen,



As a man and woman meet and love forthwith.  
Perhaps there are moments of awakening,  
Extreme, fortuitous, personal,

(CP, 386)

と歌っている。

従って、“the first idea”を表出させるには作品中で、“On the image of what we see, to catch from that/ Irrational moment its unreasoning” (CP, 398)ということに取りかからねばならない。

万人が持つ共通認識に満たされた世界ではなく、一人一人の個別的認識の世界を作り上げねばならないことを詩人は、

[mens'] interest in the imagination and its work is to be regarded . . . as a vital self-assertion in a world in which nothing but the self remains, if that remains. (NA, 171)

と述べている。

そこには2つのレベルが存在している。意識下 (subconsciousness) の世界と無意識 (unconsciousness) の世界である。万人の持つ共通認識と個人的な認識世界は、全く別のものとは言えない。なぜなら共に言葉という共通の記号で表わさざるをえないからである。これは、言語で構築された精神世界を離脱しては生きられない生物である人間の宿命なのだ。

一方、個人の意識下の世界と無意識の世界においては、必ずしも万人共通の理性を用いて世界を構築する必要はない。意識下の世界では、言語の持つ共同体的領域が、個人の裁量によって、どのようにでも変更可能だからだ。その共同体的領域の最周縁部は、無意識の世界と常に境を接しており、揺れ動いている。また無意識の世界は非理性の支配する世界である。従って個人においては理性によって規定されていたものが、非理性によって覆えされる。

つまり “the irrational is rational” (*CP*, 406) という事態が生じる。ここには Stevens の次のような考えが反映されている。 “the imagination is the power that enables us to perceive the normal in the abnormal, the opposite of chaos in chaos.” (*NA*, 153)

矛盾する 2 つの要素を備えている “major man” は、次に Canon Aspirin へと変容し、この 2 つの要素が相反することに意味があることを示す。

When at long midnight the Canon came to sleep  
 And normal things had yawned themselves away,  
 The nothingness was a nakedness, a point,

Beyond which fact could not progress as fact.  
 Thereon the learning of the man conceived  
 Once more night's pale illuminations, gold

Beneath, far underneath, the surface of  
 His eye and audible in the mountain of  
 His ear, the very material of his mind.

So that he was the ascending wings he saw  
 And moved on them in orbits' outer stars  
 Descending to the children's bed, on which

They lay. Forth then with huge pathetic force  
 Straight to the utmost crown of night he flew.  
 The nothingness was a nakedness, a point

Beyond which thought could not progress as thought. (CP, 402-03)

Canon Aspirin は現実世界では聖堂参事会員であり、規律や戒律を具現化している。“He imposes orders as he thinks of them,” (CP, 403) と規律を強制する。この“orders”とは共同体全域におよび、生活や精神風土に枠をはめる。この点で“reason”と同じ性質を持つ。

しかし彼も一旦眠ると Milton 的 Satan のような翼を獲得し、夢幻の世界を飛行する。この翼は“winged by an unconscious will” (CP, 382) (無意識の意志によって飛翔している) のである。この無意識の世界での飛行は、最終的に眠る子供の枕元へ降下して終了する。

Milton 的 Satan の螺旋状降下というイメージの中には、時間の流れに関する循環の流れと、直線の流れという考え方の融合がみられる。今この動きのベクトルは下方へ向いて、時間的にみれば過去へむかっている。これは人間がまだ未開であった頃に依存していたと思われる原初的領域、あるいは霊的な領域への回帰と考えられる。思考が思考として形作られる以前の無意識の領域へ、舞い降りるというイメージは“Poetry is a search for the inexplicable.”<sup>6</sup> という Stevens の主張を裏付けるとと思われる。無意識の世界は、非理性や混沌によって支配されているので、思考や現実といったものは存在基盤を失っている。

Stevens は言葉とももの“immaculate”な関係をみつけるために、“nothingness”が支配するこの領域に踏み入る。この領域は全くなにもない真空状態ではない。clouds や weather が大気中の air の存在を我々に知らしめるように、我々が感じるけれども、理解できない感覚の支配する世界である。

従って Aspirin の下降は、次のように肯定される。

Not to impose, not to have reasoned at all,

Out of nothing to have come on major weather,

It is possible, possible, possible. It must

Be possible. It must be that in time

The real will from its crude compoundings come, (CP, 404)

そして Aspirin はついに理性と非理性の調和を選択するのである。“He chose to include the things/ That in each other are included, the whole,/ The complicate, the amassing harmony.” (CP, 403) つまり Aspirin は相反する2つのものが互いを必要としていて、そこから偶然に起きる変化の必要性を理解したと言えよう。

事実や思考の成立する共通理解のコードに占められた領域と、“nothingness” が支配する領域との境界は常に揺れ動く。“major man” は読者をこの境界へ誘い込む。そこは自らの発するコードと、自らにとって全くの他者である読者の読みの行為が交わる地点である。両者の交わりは互いに相手を変容させて、両者だけが共有する新たなコードを生み出す。このコードは以前から存在したのではなく、両者が交わった後はじめて生まれるのである。しかもこれは詩人と読者が相互に発信しあうコードのせめぎあいの中、偶然に生み出される。

この2つの相反するものの調和をはかり、Stevens は、Simone Weil の“decreation”という言葉にみられる、相反する力、創造と破壊の融合によるダイナミクスを、“the first idea” に与えようとしているようだ。

[Simone Weil] says that decreation is making pass from the created to the uncreated, but that destruction is making pass from the created to nothingness. (NA, 174)

Stevens の目指す“the first idea”の創造とは the uncreated なもの、つまり未だ見つけ出されていないものを、言語という the created (既知の体系) よりつくりだすことなのである。この引用中にみられる“decreation”とは

*Notes* における abstraction に相当すると思われる。Michael Davidson の次の指摘は妥当であろう。

When Stevens says of the poem, "It must be abstract," he means abstraction not as generalization but, paradoxically, as the intensification of particularity to the point where a thing we must "unsee" it, abstract it and defamiliarize it, create a language with the same freshness and poignancy as the thing itself.<sup>7</sup>

## V 新たな意味の生成される「場」の誕生

これまで考察したように、Stevens にとっての創造とは、つくりだすというよりむしろ破壊するということである。既製の世界認識の方法を打ち壊すことによって始めて、"fresh", "immaculate" な詩的眞実に到達できるのである。しかもそれは "the inexplicable", 説明不可能なものである。一方詩的眞実は、共通認識によって支えられた "a form of speech" (*CP*, 397) により表現するしかない。

最後の cant x の中には、言葉では表しようのないものを、言葉によって表出させるための詩人の到達点が明らかにされている。

Fat girl, terrestrial, my summer, my night,  
How is it I find you in difference, see you there  
In a moving contour, a change not quite completed?

You are familiar yet an aberration.  
Civil, madam, I am, but underneath  
A tree, this unprovoked sensation requires  
That I should name you flatly, waste no words,

You remain the more than natural figure. You  
Become the soft-footed phantom, the irrational

Distortion, however fragrant, however dear. (CP, 406)

“Fat girl” とよびかけられた major man は変化し続け、形が定まらない。だから “familiar” になると同時に、我々の知覚をすりぬけていく “an aberration” へと変化する。さらに “this unprovoked sensation” (まだ誘発されていない感情) となり、言葉を用いることなく名づけるよう詩人に要求する。ここでは主体であるはずの詩人が、生み出したはずの客体につき動かされている。つまり主体と客体の逆転がみられる。詩人の内部で自らの “unprovoked sensation” が語り出すとき、もはや「私」は語り手ではなくなり、聴き手となってしまふ。主体の非人称化がおこるのだ。

詩人は Section I, cant i の冒頭で “ephebe” とよびかけて作品を展開する。“major man” が MacCullough と変容したように、以下 “the old seraph,” “the man in that old coat, those sagging pantaloons,” “a dead shepherd,” “Canon Aspirin,” “the blue woman,” “angel,” “fat girl” などとその変容は繰り返される。Section III, cant viii で “Is it he [angel] or is it I that experience this? (CP, 404) とついに “the first idea” をもともとて変容を繰り返してきた “major man” は、詩人自身と区別がつかなくなる。変容を繰り返してきた “major man” は、詩人による「人間」という観念の様々なバリエーションと言える。このことは語り手である詩人の主体が解体され、複数化、多様化へとむかった結果であろう。そして主体は “the more than natural figure” (ありのままの表象以上のもの)、“the irrational distortion” (反—合理のねじれ) となる。その結果、“irrational distortion” は主体と客体、語り手と聴き手、意識と無意識、精神と自然との関係を “decreate” する。

つまり詩人と読者、あるいはテキストを媒介とした両者が互いに誘惑しあ

う。それにより既存の閉じられた言語空間を越えて生まれる「場」が、“a muddy centre before we breathed.” (CP, 383) という中心である。「どろどろとした中心」では現行の世界秩序、既成の意味に支配された世界が解消され、混沌とした世界が生じるのだ。この中心は“merely going round is a final good” (CP, 405) となるまで、回転運動を繰り返す。なぜなら詩人と読者の放つコードは、せめぎあうことによりダイナミクスを獲得するからだ。それにより今まで存在しなかった新たな言語コードを生み出し続ける。それが Stevens にとっての“the first idea”である。そして語る自我は消滅するが、そのディオニュソスの力と混乱のダイナミズムによって、生のあらゆる多様性と偶然性が生まれ出る「場」は、Stevens が“my fluent mundo” (CP, 407) と呼ぶものであり、この作品の目指した“a supreme fiction”なのだろう。

## 注

本稿は第30回日本アメリカ文学会全国大会（1991年10月26日、於琉球大学）での発表原稿に加筆訂正したものである。

- 1 Wallace Stevens, *The Collected Poems of Wallace Stevens* (New York: Knopf, 1982), p. 382. 以下の Stevens の詩の引用はすべてこの版による。尚、引用は本文中の ( ) にページを示す。以下 CP と略記する。
- 2 Wallace Stevens, *The Necessary Angel: Essay on Reality and the Imagination* (New York: Knopf, 1951), p. 36. この版からの引用は本文中に NA と略記しページを示す。
- 3 *Letters of Wallace Stevens*, ed. Holly Stevens (New York: Knopf, 1966), p. 434. この版からの引用は本文中に LWS と略記しページを示す。
- 4 立川健二・山田広昭『現代言語論』（東京：新曜社，1990），参考
- 5 Harold Bloom, *Wallace Stevens: The Poem of Our Climate* (Ithaca: Cornell University Press, 1977), p. 189.
- 6 Wallace Stevens, *Opus Posthumous* (New York: Knopf, 1989), p. 198.
- 7 Michael Davidson, “Notes beyond the Notes: Wallace Stevens and Contemporary Poetics” in *Wallace Stevens: The Poetics of Modernism*, ed. Albert Gelpi (New York: Cambridge University Press, 1990), p. 153.